山田(旧姓 佐藤)良子 (34)の 生い立ち

良子は、一九八二年、父 中山敦夫が三十歳、母 中山紀江が二十七歳の時、佐賀県鳥栖市に誕生する。良子が四歳の時、弟の圭人が続く。ほぼ同じ頃、父親は、仕事を求め知人を頼って東京に出て行くが二年目の夏から、連絡が途絶え消息を消す。

母親は、福岡県久留米市の実家に戻り旧姓の佐藤紀江に戻す。収入がないので、夜はスナックで働き始める。

家の家事、子供達の面倒は、紀江の母 佐藤しず子が見ることとなる。母と良子は、親子なのになぜかソリが合わない。祖母は、市役所に勤める夫 章太郎と結婚して佐藤家に嫁いできた。その祖父も十年前に肺がんで亡くし、わずかな保険と畑仕事で生計を立てていた。祖父は、落語や囲碁を楽しむ趣味人で、穏やかな性格だった。

祖母は、きちんと家事をこなし良き妻であることを美学としていた。母の目の前の楽しいことを大切にする楽観的な性分は、祖父に似ていると聞かされた。

祖母は、母が子供たちを早く寝せないことやしつけをしないこと部屋を片ずけないことなどが気に入らない。戦前の考え方を無理強いして孫達を厳しく育てた。たまに手をあげることもあった。良子は、外で活発に遊ぶというより、部屋の中でアニメ番組を見たり、そのキャラクターをノートに描いて、物語を空想して過ごす事が、多かった。祖母と母の諍いから逃げるように。

そんな時、いつも側にいて良子を慕っていたのが弟 圭人である。今でも、人の顔色を伺う癖があるのは、大人たちの争う姿をたくさん 見てしまったからやもしれない。幼稚園は、市内の歩いて通える所にあった。発表会では、主役に選ばれても家でそのことは、話さなかった。祖母が、観に来ることが恥ずかしかったから。運動会も、嫌いだった。元々走ることが得意ではなかったから。行事が嫌いなのは、小中高と続いた。母は、良子が十歳になってすぐ店の常連だった男に口説かれて、家に帰らない日も増えて育児を放棄した。 祖母は、実家の田畑を売るなどして、良子を短大まで進学させた。良子は、小学校、五年生の時、近くのスーパーで圭人を見張りに立て、板チョコを1枚、万引きしたことがある。

次の日、職員室に呼び出され、先生に万引きをしてないかと問い詰められた。無言を通した。後から、一年生だった圭人も呼ばれた。彼は、盗んだのは自分だと言い張った。圭人は、先生に一時間近く窃盗の罪についてしつこく注意を受けた。圭人が泣くのを待つように。良子の方が、先に泣いてしまった。中学生になった夏、同じクラスの木寺君を無意識に目が追いかけている自分に気がつき戸惑った。美術部に入った良子は、野球部で大きな声を張り上げて球を追いかけている木寺君をキャンバスの脇から覗いた。自分のお腹の奥が、熱くなり湿るような汗とは違う匂いを嗅いだ。良子は、祖母と母の性分の両面が自分の中にあることを自覚していた。理性的であり、衝動的でもあること。ほぼ同じ頃、美術部の友人の勧めでロックを聴くようになった。洋楽、それもイギリス系にハマっていった。退廃的な歌い方と、体制に批判的な姿勢が気に入った。リアルタイムではなかったが二十年くらい前に流行ったパンクロックからの流れを意識して新しいバンドを探していった。この頃覚えた歌は、今でも全身に刷り込まれている。授業は真面目に聞いていたので成績は、学年で十番くらい。久留米市内の普通高校に進学した。将来は、音楽のグラフィックや映像に関わる仕事をしたい、東京に出たい美大に行きたいとぼんやりと考えていた。コンビニでアルバイトをしながら、週に一回美大受験のデッサンを習いに福岡市内の予備校に電車で通うようになった。ここで、二歳年上の山田正と出会う。正も、東京の美大を受験するために通っていた。良子は、初めて正の鉛筆デッサンを見た時の衝撃を今でも はっきりと覚えている。精巧に描かれたマルス像は、立体的でバランスも正確で胸板のツヤまでもリアルに再現されていた。良子は、かなわないと思ったし近づいて技術を盗みたいと思った。良子は、男性がどんな服、仕草を好むのか誰かを真似するわけでもなく身につけていた。いつも正の側にイーゼルを立てたが、たまに正にアドバイスを求めるくらいで特に長く話をするわけでもなかった。 正は、受験に真剣だった。

二月になり正は、多摩美術大学グラフィックデザイン科を受験し見事に合格した。三月末には、福岡を離れ東京に越したと、予備校の先生に聞いた。次に正に会えたのは、夏期講習。正は、講師として現れた。髪を伸ばし黒ぶちの眼鏡をかけ黒いTシャツにインディゴのスキニーなデニムといったいで立ちですっかり都会を通過した彼は良子に眩しく見えた。良子は、九十年代のポップアイコン(ケイトモス)のプリントされたTシャツに、膝に穴の開いた黒のデニム、靴はコンバースを履いていた。

八月の頭、授業終わりにみんなで大濠公園に花火を観にいった帰り居酒屋に入った。正は、隣になった良子に東京のレベルの高さやデザインに対する造詣の深さ、ニューヨークやロンドンのデザインの傾向などを話をし、良子は、デッサンが思うように上達しないこと、週三回通いたいが経済的苦しいことを話した。閉店になり、店を出た二人はあてもなく歩きながら話を続けた。正は、少しずつ自分の夢や好き作家、好きな風景、音楽など話をしてくれた。良子も、同じように好きな風景、音楽を答えた。二人きりでじっくり話をしたのは初めてで、正が論理的に物事を考える面と子供みたいな幼稚さを合わせ持つことを見抜いた。

深夜のファミレスで向かいに座った。正に気づかれないように、指の形、関節、骨格、髪質など正の細部を観察し、目に焼き付けた。そして、店を出たら手を握りたいと強く思った。良子の欲動は叶わず始発の西鉄天神駅の改札で別れた。三年生の夏期講習に正は来なかった。良子は、残念に思った。東京の美大を受験したいことを祖母に伝えたが、学費や生活費を考えると難しいと言われ、福岡市内のデザイン学部のある短大に進学し、すぐに仕事に役に立つソフトの使い方を身につけ、西鉄系の小さな広告代理店に就職した。会社案内のパンフレットや駅ビルのチラシのレイアウトや数字の修正など細かい作業で朝になることもあった。社会に必要とされて感じがして仕事は、嫌いではなかった。自分で稼げることが嬉しかった。人あたりのいい良子は、職場でも取引先でも可愛がられた。あっという間に三年が過ぎた。

久留米には、月に一度は帰った。圭人は、ファミレスでバイトしたりネットを使ってスニーカーを輸入して売ったりしていた。たまに二人で飲みに行ってカラオケで熱唱した。仕事がらみや合コンで数名の男と出会った。食事やドライブに行ったり、ウマが合った人と寝た。 三人目のボーイフレンドには、結婚を申し込まれたが、自分の直感を信じ別れた頃、正が個展のために福岡に帰って来てることを偶然 再会した予備校の同級生に聞き、会いに行く。良子は、二十五歳だった。

グラフィックデザイナーとして独立も果たし、作家としても人気の出ていた正は、自信に溢れ輝いて見えた。どの作品もユーモ

アがあった。中でも、銅版画のシリーズが好きだった。細かい線が、重なっていて近づいてよく見るとその中にマクドナルドやピザハットのロゴが、隠れていた。正は、東京から連れて来ていたベージュのカーディガンのガールフレンドに、「予備校の時の教え子」と良子のことを紹介した。オープニングパーティーには、広告業界の知り合いも来ていてたが、誰と何を話したのか覚えてにない。嫉妬なのか、とにかくショックだった。正に後でそのことを話しても彼は覚えてなかった。二十六歳になった頃、上司とのいざこざや後輩との関係に疲れ仕事を辞めた。フリーランスとしてそれまでのクライントから仕事をもらったが半年もすると激減した。

元の会社からの圧力だった。それから一年が過ぎた頃、正の父親が亡くなる。彼は福岡に帰省した。

葬儀が終わって数日した頃、良子は正に電話で会いたいと言われた。夜六時に市内の寿司屋で待ち合わせをした。話は、尽きなかった。その後、西鉄グランドホテルのバーに移動した。正は、ジントニック。良子は、モスコミール。それぞれ二杯ずつ飲み終えた頃、正に上に部屋が取ってあることを告げられた。 断る理由はなかった。ベットでは、お互いの体の隅々を確認するように激しく交わった。何度も何度も。その日から、週に何日も会うようになった。良子は、東京にある正のアトリエにも会いに上京した。アトリエでもした。壁には、正の銅版画が掛けてあった。二ヶ月が過ぎた頃、良子は妊娠した。正は、戸惑ったがグラフィックの受注仕事を止めて福岡をベースに作家としてやっていくことを、自身のホームページで宣言した。良子は、プロポーズを受け入れた。糸島にある正の実家で結婚生活はスタートした。義母 和子とは、生活習慣の違いなどからストレスがあった。良子のいない隙に、義母が娘の智子に愚痴の電話をかけていることは、知っていた。義母は、二階の奥に住んでいた。二十八歳の時、宏が産まれた。 正は、アトリエに籠もることが多く海外や東京に行ったりで家にあまりいなかったが、家族にそれぞれ必ずお土産を買ってきた。

弟の主人には、自分の貯金から小遣いをあげた。正は、絵が思うように売れないで焦っていた。アトリエで、ヒントになればと思い感想を言うと素直に聞く時もあれば、激怒して手を上げられる時もあった。夜は、正が求めてくる時だけ答えた。二年もした頃、ストレスで過食になった良子は、お腹の周りのついた贅肉に気づいた。 正は、それをつねり殴った。良子は、できるだけ太らないように気をつけたが、痩せたり太ったりを繰り返し正の暴力もそれに比例した。何気ない会話での良子の発言にキレられることもあった。良子は、殴る正を憎んだ。でもしばらく日にちが経つと自分が言葉や体形に気をつけよう、我慢しようと思った。良子が三十四歳になった頃、弟が水野のつてでスナックの店長になった。バイトの女の子も二人しか雇えなかったので良子が手伝った。やたら触ってくる客もうまくかわした。多少家事が終わらずに店に行くことがあって義母に甘えることもあった。その頃、正にも変化があった。弟経由で、水野と知り合い有名作家のシルクスクリーンの贋作で稼ぐようになっていた。 良子は、正が前のように広告の仕事をすることを希望したが、正のプライドが許さなかった。どうでもいい作家の贋作を作る方が、よっぽどマシだと正に言われる。

義母 和子(62)の 生い立ち

和子は、一九五四年、父 武田錬三郎が、三十五歳 母 武田富子二十七歳の時に福岡県早良区高取で、二つ上の兄に続いて長女として産まれる。二年後と四年後にそれぞれ弟が産まれた。

家は、寝具などを売る祖父の時代から続く商家であった。常に忙しい日常だったが、父も母も店先に出て客と笑い合う楽しい家庭だった。和子は、忙しい両親に代わってよく弟たちの面倒を見た。小学生の時は自分の同級生と遊ぶ時も一緒に連れて行った。 小学校では、目立たない子供だった。高学年になると母が夕食を作る間、店を手伝った。中学に入ると一人娘だからか華道と日本舞踊を母の勧めで習った。どちらも嫌いじゃなかったし、先生にもよく褒められた。母からは、女としての作法を厳しく躾けられた。上座のこと、座敷での挨拶の仕方、出汁の取り方など。母は、「嫁に行っても恥ずかしくないように」とよく言った。高校では、文芸部に所属し暇さえあれば本を読んだし部室に集まった友達と、話をすることが楽しかった。よく笑う楽しい高校生活。二年生の時、隣のクラスの男子を好きになった。グランドでラクビーをしていた彼を下校時にこっそり覗いた。告白することもなく二十年後の同窓会で始めて好きだったことを伝えると、彼も和子のことを好きだったことを知った。卒業後は、市内の短大に進む。商学部に入って市内のデパートにでも就職できたらと思っていた。店は、兄が継いでいた。広かった家の通りに面した一部をジャズ喫茶に改装して友人を店長に迎えた。和子は、保険会社に就職した。最初は先輩について個人契約を取りに住宅地を回った。バブル景気前だったが契約者も多かったし保険金の額も大きかった。世の中全体が、浮かれた感じがしていた。飲んで帰ってもタクシー代は経費で落ちた。高校の友人たちと国内旅行によく出かけた。一度、ハワイにも行った。仕事も順調で、中学校や市役所などにも営業に行った。高取中学校で体育教師の山田厚夫に出会う。

厚夫は、二十八歳、和子は、二十三歳だった。最初のデートは厚夫から誘って天神で映画を観て、西中洲でうなぎを食べた。誠実で優しい目をした厚夫は、言葉を選びながら自分の生い立ちを語った。二回目のデートは、厚夫が通った大学の後輩たちの剣道大会を観に行った。試合の合間に後輩たちと談笑する厚夫に和子は、惹かれていった。二年の交際の後、厚夫は、和子にプロポーズした。 どちらの親も反対しなかった。古い農家である厚夫の家に馴染めるかだけが心配だった。厚夫の「俺が守る」の言葉を信じた。新婚旅行は沖縄に行った。帰ると夫の両親、祖父、夫の妹との五人暮らしが始まった。和子は、家のしきたりを必死に覚えた。仕事も続けていたのでいつも忙しかった。厚夫は、転任なった隣町の中学で剣道部のコーチになって土日も練習に出かけた。姑は、和子に時々きつく当たったが堪えた。

三年目に待望の子供が生まれた。

男の子だった。名前を正とした。夫の親は、跡取りが出来たとたいそう喜んだ。一ヶ月もしないで祖父が亡くなった。和子は、仕事を辞めて専業主婦になった。正が、六歳の時に智子が産まれた。正は、小学生の頃から勉強もスポーツもできるし性格も明るかったので、クラスの中心的な存在だったがふざけたり授業中に席を立ったり落ち着きのない面もあり時々、和子は学校に呼び出された。夫が激怒している日があった。部屋が散らかっているとか和子は、基本的に温厚な性格だったので驚いた。近所の目、親類、友人の目を気にして良い妻を良い母親を通した。いつも理性的であろうとした。

正が 小学五年生の時、和子が珍しく中学の同窓会に出かけて少し酔って遅く帰宅した。夫は、ソファーに横になる和子の腕を捕まえ座敷に引きずって行った。そこには、物干しからしまった乾いた洗濯物が山積みになっていた。和子は、出かける前に雨が降りそうで慌ててしまったままだった。夫は、和子の頭を後ろから掴み洗濯物の山に押し付けた。それには、我慢できず夫を睨

みつけた。夫は、その瞬間、頬を平手で叩いた。

子供のこともあり理性的な自分に、冷静な日常に戻した。智子は、母の後ろにいつもくっついてきた。幼稚園での様子をよく話をしてくれた。小学校の三年くらいからクラスの女子からいじめを受けていたが、そのことを和子は知らなかった。正は、中学に入ると、野球部に入った。二年生でレギュラーになりピッチャーで四番を打った。和子は、よく応援に行った。高校は、自宅から通える普通科のある県立高校に進学した。美術部を選んだ正は楽しそうだった。

二年生の時描いた油絵が、県の美術展で最高賞を受賞した。和子は、誇らしかった。夫は将来役に立つのかとかいうぐらいで褒めなかった。正は、現役で多摩美術大学グラフィックデザイン科に入学し、上京した。

正は、正月に帰るぐらいで長い時間を一緒に過ごすことはなくなり、和子はとても寂しく思った。正は、大学を卒業すると、東京で就職した。仕事は、充実してるようだった。たまに、電話をくれた。

正が、二十八歳になった時だった。福岡での個展のオープニングパーティーに彼女を連れて帰福した。彼女は、郊外にある正の家をあからさまに毛嫌いし、ロンドンやニューヨークに活動の場を移すべきだと夫と和子に力説した。

数ヶ月後、夫は、大動脈剥離が原因で突然亡くなってしまった。よく喧嘩もしたし苦労もあったが長年連れ添った親しい間柄だったので和子は、ぽっかり心に穴が空いたようで一気に老けてしまった。間も無く正が、結婚すると言っていきなり良子を連れて来た。お腹には、子供を身ごもっていた。

正は、福岡に拠点を移した。孫の宏が産まれた。和子は、とても嬉しかった。糸島の家の二階にアトリエを構え、大きな作品を制作した。できた作品を持って、国内外のギャラリーを回った。

ロサンジェルスとベルリンで、個展が決まった。正は、仕事で家にあまりいなかった。和子は、良子といる時間が長く関係がギクシャクしてきた。宏は、可愛かった。よく面倒を見てあげた。良子が、三十四歳になった頃、圭人がスナックの店長になって、良子が店を手伝うため夜出かけることが多くなった。 和子の家事の負担が増えたが、表立って問題にしなかったが、たまにポロリと本音が出ることもあった。正が、どうやってお金を稼いるか知らないでいた。夫の両親、祖父も亡くなった。

夫　正(36)の 生い立ち

正は、一九八〇年、山田厚夫と和子の長男として福岡市に産まれた。父親は、中学の体育教師で家事はやらない古いタイプの男だった。母親は、保険の営業をしていたが正の誕生をきっかけに仕事を辞め専業主婦となった。六歳の時、妹の智子が産まれた。正は、小学生の頃から勉強もスポーツもできるし性格も明るかったのでクラスの中心的な存在だったがふざけたり授業中に席を立ったり落ち着きのない面もあった。

父は、家に帰るやいなや激怒する日があった。部屋が散らかっているとか、玄関の靴が揃っていないとか、正にはなぜそこまで怒る必要があるのか、理解できなかったしなんで怒っているのか理由を知るまで時間のかかる日もあった。父親に対して表で決して見せないがある種、軽蔑に近い嫌悪感を持っていた。

母は、基本的に温厚な優しい人だったが世間体を人一倍気にする人だった。いつも理性的でいるように見えたが、ひょうきんな面もあった。例えば、台風の日。正はずぶ濡れで帰宅した。痩せた体にシャツがまとわりついた姿をみて母は爆笑し、体をタオルで拭いてくれた。小学五年生の時、母が珍し酔って遅く帰宅した。なにやら父ともめる声がしたので慌てて座敷に向かうと父は母の頭を後ろから掴み洗濯物の山に押し付けた。母は、父を睨みつけた。父は、その瞬間、母を殴り母は、倒れた。正は、このことを今でも忘れられない。妹の智子とは、年も離れていたので、一緒に遊んだ覚えはない。正は、中学に入ると野球部に入った。体も大きく運動神経のいい正は、たいしたことない上級生に目をつけられ声が小さいだの挨拶しなかっただの因縁をつけられた。

納得が行かなくて野球部をやめようとするが父は反対し怒った。根性がない始めたからには最後までやり通せ。二年生でレギュラーになりピッチャーで四番を打ったが、どこか熱中できない自分に気が付いた。試合に負けて帰ると父にボロカスにけなされた。父は、大学まで続けた剣道で県大会準優勝したことを酔うと必ず自慢した。

逃げるな頑張って続ければなんとかなるとまくし立てた。そんな父への反発心だけで野球を辞めずに続けた。中学の間は。社会の授業が退屈で、ノートの端に自分の左手を右手で描いていた。先生に見つかり怒られるかと思ったら、ノートを取り上げ授業終わりに美術教師の所に持って行かれた。数日後、昼休みに校内放送で美術準備室に呼び出された。美術の先生は、正の絵の才能を高く評価した。レオナルドダビンチの素描画からセザンヌら印象派の作品を大きな画集で見せてくれた。昼休みに美術準備室に遊びに行くようになった。いろんな作家を知る中で特にマチスを好んだ。色彩豊かでボリュームのある女性の肉感など言葉で上手く説明できなかったが、昼休みはマチスの画集を食いいるように観た。中学三年の夏休み前に野球部は、地区大会の三回戦で敗れ終わった。美術教師の勧めもあり、美大に行って絵を学びたいと思うようになっていた。高校は、自宅から通える普通科のある県立校に進学した。運動部には入らずに美術部に入った。美術部は、妙な上下関係はなく自分の知らない音楽やファッションなど、教えてくれる同級生に出会った。特に、ロンドンのワープレコードの連中が好きになった。日本人の打ち込み系アーティストにもハマって行った。 音とジャケットデザイン、ミュージックビデオでアーティストの世界観が表現されていることに痺れた。ファッションの好きな女の先輩には、ボーグやエルを借りて、カメラマンがテーマを決めて物語を数ページを使って表現することも知った。写真に写ったモデルたちの手足の長さや、骨の浮かびあがった背中など、美しいと思った。男の先輩からは、映画のDVDを借りた。昔の映画は映像も脚本もよくて何本も観た。溝口健二、成瀬巳喜男、川島雄三。放課後の美術室が、最高に楽しかった。

いつの間にか正の周りに輪ができた。二年生の時描いた油絵が、県の美術展で最高賞を受賞した。

高校生が、受賞したのは初めてだった。母は喜んでくれたが父は将来役に立つのかとかいうぐらいで褒めなかった。正は、好きなアーティストや展覧会やお店のある東京に憧れた。自分の絵の実力を試したかった。父には、美術の先生になると嘘をついて天神の美大受験の予備校に行くことを許してもらった。受講生は、福岡県内から集まっていて一年生から始めている人ばかりでレベルの高さに、正は焦った。鉛筆で石膏像をデッサンした。デッサンには、うまく描くコツがあった。正は、ひたすら描きまくった。その甲斐あって、十倍の競争率にもかかわらず現役で多摩美術大学グラフィックデザイン科に合格し、念願の上京を果たした。正の大学生活は、充実していた。膨大に出される課題をこなし、週に四回、居酒屋でバイトも始めた。

隙間で観たいライブや展覧会に積極的に足を運んで東京で起きていることを吸収していった。冬には同じ学部の同級生の彼女もできた。正の方からって言うより彼女の方が積極的だった。

正はなんとなく流れで初めて行為をした。済ませた。初めての時はわけがわからず終わったがしばらく行為に夢中になった。福岡に帰省もせずに。母親からは、何度か電話があったがバイトが忙しいとか適当にごまかした。その彼女のことは、行為と終わって行った駅前の中華料理店の炒飯の味しか思い出せない。

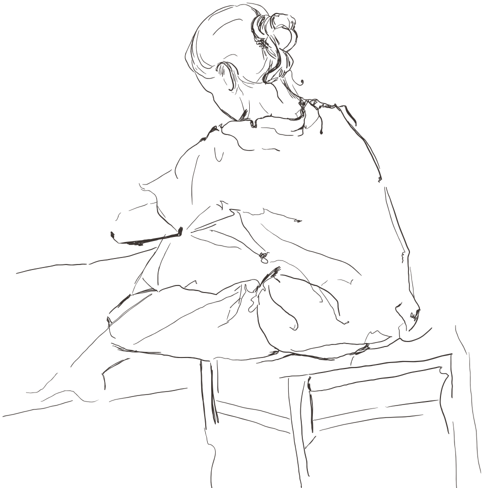
やりっぱなしで春になった頃、彼女が側にいることが急に嫌になって正の方から別れを切り出したら、ものすごい勢いで泣かれて最後にもう一回してと言われ正は機械のように動いた。彼女と別れて、自分の絵のスタイルを探すべく絵に没頭した。

夏休みは福岡に帰って予備校の講師のバイトをした。

八十年代のポップアイコンのプリントされた　シャツに膝に穴の開いた黒のデニムに、コンバースを履いた良子に出会った。服の間から伸びてる白い肌の長い手足が印象的だった。音楽の好みはロックだと、外見で判断できた。学校(技術)、バイト(生活)、その他(自分探し)のトライアングルの中で、一年が過ぎた。三年生の夏から就職活動の時期になった。音楽系のデザイン事務所か大手の広告会社か迷ったがデザイン事務所は徒弟制が厳しいと聞き、憧れてるデザイナーのいる博報堂を希望して見事合格した。社会人になってほぼ全ての時間を仕事に費やした。最初の三年は仕事を覚えるのに必死だった。

先輩たちの消費者の動向を読んで巧みに計画される広告コミュニケーションの戦術の組み立て方やデザイン、写真の良し悪しの判断の粘りに驚いた。また、クライントに対して丁寧に分かりやすく広告の効果やキャンペーンの役割を説明する話術の的確さに仕事の面白さを感じた。四年目からデザイナーとして参加することが認められた正は、身につけた技術と生まれ持った才能と話術で小さなクライントではあったが、戦略が見事に的中し小学生がモノマネする話題のキャンペーンを生み出した。一気に注目の若手として表に出て来た正に、大手のクライントからも指名が入った。正は、ひるまずに一つ一つ丁寧に仕上げていき、若くして業界に確固たるポジションを築いた。五年目を過ぎた頃、仕事で訪れたパリの美術館で好きだったマチスのオリジナルを目の当たりにして、自分の原点、中学の美術準備室に意識は戻った。普段、クライントに対して何をすべきかの目線を優先するがあまり自由な発想、表現を見失っていた。

パリから戻った正は仕事のスタンスを変えたいと上司に伝えた。上司は、会社的に絶対外せない競合の時は、必ず参加する事を条件に正の希望を受け入れた。空いてる時間は、勤務時間内でも自分の作品を制作することを許すもので会社始まって以来の特例だった。自宅の居間を改造したアトリエで、広告で培った人を惹きつけるコンセプトを探した。そして、古典的な技法の銅版画でありながら社会をシニカルなテーマで描く表現に行き着いた。二十八歳だった。東京のギャラリーと契約し、東京、大阪、福岡で個展が開かれた。いきなり三都市での開催は、新人としては異例なことだった。東京の展覧会には、ロンドンやニューヨークのギャラリストも訪れ海外での展示を打診してきた。彼らは、もっとサイズの大きな作品を作るようにアドバイスした。銅版画のシリーズは、評判が良かった。何回も重ねて刷った版画で、奥のレイヤーにグローバル企業のロゴを隠したことが成功した。正は、有頂天だった。付き合って間もない彼女も喜んでくれた。英語も堪能な彼女は、正と一緒になってまだ見ぬ場所を目指した。福岡の個展には、彼女も一緒に帰った。彼女は、郊外にある正の実家をあからさまに毛嫌いし、ロンドン、ニューヨークに活動の場を移すべきだと言った。勝気な彼女とはぶつかることが増え体の相性も良くなかった(彼女がリードしたがる)し別れた。数ヶ月後、父を大動脈剥離で突然亡くす。急いで福岡に戻った。すっかりやせ細った母が正を迎えた。葬儀が終わって数日した頃、良子に電話をかけて会いたいと伝えた。夜六時に赤坂の寿司屋で待ち合わせをし、食事を終えるとバーに行って酒を飲んで、ベットに誘った。十年前に初めて会った時から惹かれていた。断られたら諦めようと思っていた。ベットで初めて繋がることを理解できたし初めて知る肉体的快楽でもあり、心が深く静かに小さく揺らいでいることがわかった。良子の慈悲深い仕草や、白い肌の裸体をずっと見ていたかった。片時も離れていることができなくなっていた。飽きることなく何回も交わった結果、子供ができた。



一緒に暮らすことを決め二人が出会った街、自分の街でもある福岡に戻った。作家としてやっていく決心でもあり、意欲的に制作に励んだ。できた作品を持って国内外のギャラリーを回った。ロサンジェルスとベルリンで、個展が決まった。航空便で作品を送る輸送費や宿泊費が、貯金を圧迫した。作品は、全く売れなかった。

どっと疲れて福岡に戻るたびに良子と母の関係がギクシャクしてきていた。就職もしないでアルバイトで食いつないでいる良子の弟 圭人も気にいらなかった。良子が、弟に家のお金から小遣いをあげているのではないかと疑った。

正は、散々な日々に焦っていた。戦略的ではなく素直に描こうとか技法やテーマを試行錯誤した。良子のアイデアに、感銘したり腹を立てたりした。イライラしている時に良子の明るさに救われることもあった。自分の機嫌のいい時だけ良子を求めた。

弟の紹介で、有名アーティストの贋作を作る仕事を始める。広告の仕事に戻れないプライドもあり、好都合だった。

結構いい稼ぎになった。良子は、この仕事を嫌っていた。まだ、広告の仕事がましだと。何よりも自分の作品を制作して欲しいと。

どうしようもなくなっているの自分自身だし言われたくない言葉をぶつけてくる良子に我慢できず手を出すこともあった。

抑えきれなかった。母親にバレないように服に隠れる所を狙って殴った。

弟 圭人(30)の 生い立ち

圭人は、一九八六年、父 中山敦夫が三十六歳と母 中山紀江が三十三歳の時に佐賀県鳥栖市に産まれる。四歳年上の姉 良子との二人兄弟。その頃、父は知人を頼って仕事を求め東京に行くが、二年目の夏から連絡が途切れ消息を消す。圭人は、父親を知らない。母は、福岡県久留米市の実家に戻り、旧姓の佐藤紀江に戻す。母は収入が途絶えたので、夜 スナックで働き始める。家の家事、子供達の面倒は、祖母 佐藤しず子が見ることとなる。祖母は、母の子供に対して寛容すぎることが気になっていた。食事中にテレビを見ることや食器を片さないことなど。祖母は、戦前の考え方を無理強いて孫達を厳しく育てた。言っても言っても聞かないときは頭を叩いた。母も圭人が、四歳になった頃に家にいる時間が短くなった。圭人は、寂しくて姉に引っ付いて回るしかなかった。姉は、よく遊んでくれた。圭人が、小学校一年生の時、スーパーで姉が板チョコを万引きをしたことがあった。姉にお店の人がお菓子売り場の列に来たら合図を送るように言われていた。次の日の放課後、職員室に担任の先生に連れて行かれると姉が万引きのことを問い詰めれていた。姉は、黙っていて答えなかった。圭人は、咄嗟に自分が取ったと言った。二人の先生は、驚きながらも圭人に窃盗の罪の重さを繰り返し説教した。姉が泣いてしまった。圭人は泣かなかった。チョコレートの半分をもらったのだから自分にも罪があると思った。中学生になると新聞配達のバイトを始めた。ぬくぬくと暮らしている同級生を恨めしく思った。なんで自分だけがこんなに不遇なんだと。部活にも入らず放課後は、街をぶらついて時間を潰した。同じように、ぶらつく他校生とも知り合った。ゲームセンターでUFOキャッチャーで景品を落とすコツをつかみレアなキャラaクターを落としては、同級生に売ってこずかいを稼いだ。高校を卒業して宅急便の会社に就職した。荷物の状況はコンピューターで管理されれおりその日に届けなければいけない荷物の量は、とても一人では限界だったし不在票を入れた家からは、夜でも電話が鳴った。我慢して一年は続けたがある日、荷物の中の陶器が割れていると玄関先で怒られ、弁償を求められたが頑なに謝って拒んだ。その夜、配り終えていないダンボールの山を雑木林に捨てて事務所に戻った。それを最後に宅急便の仕事は辞めた。その後もコンビニ、ファミレスとバイトを転々としたがどれも長く続かなかった。中学の頃、知り合った友達からネズミ講に誘われ布団を高く売りつけられたこともあった。自分は一つも売ることができなかった。就職で福岡市内で一人暮らしをはじめた姉は、月に一度は久留米に戻った。その頃、圭人は、ネットを使って珍しいスニーカーを海外から輸入して売ったりして自営業を夢見たが思ったように売れなくて在庫を抱える始末だった。たまに二人で飲みに行って、カラオケで熱唱した。姉はうだつの上がらない自分に 二万円の小遣いをくれた。姉は、結婚して夫の家に入った。久しぶりにあった姉は、元気がなかった。どうも夫や姑とうまくいっていないらしい。あんなに熱く惹かれあって結婚したはずなのに。特に夫の仕事がダメだと。圭人は街をぶらついていた頃からの知り合いの水野のつてでスナックの店長を任されることになり、ここで踏ん張ろうと思った。お店が流行るまで接客女子を雇う予算は2人がギリだったので姉に頼んでお店に出てもらった。

義妹 智子(30)の 生い立ち。

智子は、一九八六年山田厚夫と山田和子の長女として福岡市に産まれた。六歳上には兄 正がいた。父親は、中学の体育教師で家事など一切やらない古いタイプの父だった。母親は、保険の営業をしていたがすでに辞めていた。父は、母、兄を怒ることはあっても、智子は怒られなかった。むしろとても可愛がられた。洋服もお菓子も必要以上に買ってもらった。智子は、母の側に寄っては幼稚園で誰と遊んだとか先生が話したこと、秋の発表会での自分の役について話をした。年の離れた兄と遊んだ記憶は少ない。幼稚園の年長の時、父の職員旅行について行った。大学卒業したばかりの新任の国語教師をすっかり気に入りバスでも記念写真でも隣に並び温泉も一緒に入った。小学生になって目元のぱっちりした智子は、目立った。本人は、目立ちたくなかった。三年生の頃からクラスの女子たちにいじめを受けた。筆箱がゴミ箱に捨てられていたり体操服が汚されていたり教室の後ろの壁に三年生になって最初に書いた智子の目標の画用紙に針で刺した後が残っていた。そのことは家族には話さなかった。今日も誰々ちゃんと鉄棒で遊んだなど、学校が楽しくて元気いっぱいなふりをした。中学になるタイミングでキャラを変えた。吹奏楽部に入った。打楽器を担当した。他校から来たおとなしそうな子に積極的に声をかけて孤立することを避けた。上手に四人のグループができた。高校は普通科のある女子校に進学した。女子校のいじめやシカトは、あからさまだった。智子は、一番派手なグループに所属して、夕方は、天神に行って遊んだ。仲間でいた方が、意外と気楽だと計算した。必然的に付き合うボーイフレンドも面白さと外見を重視した。内面より。母は何も言わなかったが父は、服装や帰宅時間について智子に直接は言わずに母を通して注意した。大学は、福岡市内の短大に自宅から通った。経理、一般事務を学ぶ学科だった。アパレル店でアルバイトして小遣いを稼いだ。外見も可愛い智子は、モテた。すぐ彼氏もできたが、どの恋もひどい終わり方だった。友達には、ダメンズ好きってからかわれた。同じビルにある洋服屋の店員だった彼は、楽しい人だったが、どうでもいいことに見栄を張り嘘をつく人だった。その次の人も明るく話の上手い人だった。ただ、商社マンで独身と聞いていたのに妻子持ちだった。彼の部屋でシャワーをしている時に、奥さんが入ってきて泥棒呼ばわりされ困惑した。聞いてなかっただけなのに。次の男はたまに朝のテレビに出て街のお店を紹介したりする人だった。仕事があって会えないと言われた日に、別の女と手をつないで大丸の前を歩いているのを見かけ頭にきて終わりにした。大学を卒業してデパートの化粧品売り場に就職した。デパートの一階にあり、白いシャツにリボンを首に巻いて颯爽と仕事している自分が誇らしかった。ただ、半年もすると仕事の裏側が見えてきた。顧客をなんとか店

頭に呼び出せとか、できるだけ高い商品をシーズンごとに買い替えさせろとか肌の奥にメラニンが潜んでいるから、今なら間に合うからと高い美白クリームを売りつけろとか言われ、客を騙すような部分に後ろめたさを感じながらも華やかな世界から離れられなかった。一年過ぎた時、給与が出来高制になった時点で、ノルマの重圧で仕事を辞めた。次の仕事は、なかなか決まらなかった。仕方なく近くのホームセンターでレジ打ちのバイトをした。

商品を覚えるのは品数が多く大変だったが、職人系の自営業の気のいいおじさんか、まとめ買いの主婦が多くレジに長蛇の列ができるわけでもなく、穏やかな気持ちで仕事ができた。

ある日、工具売り場で商品の陳列をしていると、田中英二に声をかけられた。ドリルドライバーの売り場を聞かれたが、答えられずに上司を呼んだ。待ってる間、英二はその道具が穴あけ・ネジ締めなどを電動でできることを丁寧に説明してくれた。

次の週は、別のお客さんにグラインダーの売り場を案内しようと陳列棚を迷っていると、また英二に会った。英二は、グラインダーの売り場を教えてくれた。その次は、近くのイオンの駐車場で偶然会って、マクドナルドでお茶をした。物知りで、今までの男にはない落ち着きがあって、智子の話をよく聞いてくれる所に、惹かれていった。ベットも今までの自分勝手に動く男と違って、丁寧に智子をリードしてくれた。何回も食事をし何日も夜を過ごすうちに智子は、団地に小さな部屋を借りた。父には、十五歳も年上の男と暮らすなら勘当するとまで言われたが、家を出ることを決めた。しばらくして父が、突然他界した。和解しないままだった。英二の慰めはありがたかったが、現実問題として生活には、問題があった。

資本と労働の意味はなんだとか、生きる意味とか、哲学的なことを語ることが多くなり、要は、廃品回収の会社も辞めて、収入はなかった。智子は、英二のことを愛していたので、自分がレジの前にいる時間を長くすればいいと考えた。智子が、仕事に疲れて帰ってくると、英二は商店街にコーヒー屋ができて、店員の女の子が親切で可愛いなど、智子を試すようなことを話した。智子が、ちょっとでも嫉妬すると英二は、ベッドに連れて行った。英二は、性欲の強い男だった。まもなく、正が良子と結婚した。良子のいない隙に智子に母から愚痴の電話がかかってきた。智子は、二週間に一度実家に顔を出した。良子とは、当たり障りのない会話をした。良子が弟の店を手伝うため夜出かけることが多くなった。母は家事の負担が増えて大変だった。兄の稼ぎは、謎だった。

義理兄 英二(42)の 生い立ち

一九七〇年。東京都世田谷区に生まれる。父 田中久は、都議会議員の秘書官。母 田中愛子は、自宅でフラワーアレンジメントの教室を開いていた。兄弟はいない。父親は、いつか自分も議員になることを狙っていることは、子供ながらに気が付いていた。電話で「そこをなんとか。」「いやー。助かります。」「このことは、なかったってことで穏便にお願いします。」と父の声が聞こえた。母は、基本的に自己流だが本などから情報を仕入れ、花も自分も派手に見せた。駒沢公園の近くに住む裕福な主婦たちに「先生。先生。」と呼ばれ喜んでいた。ポイント制にして長く続けると、ステンドグラスの花瓶をプレゼントするなど、生徒を増やすことも上手だった。上級者クラスと初心者クラスに分けたりして、生徒の心をくすぐった。英二は、子供の頃から感情的になることが少なかった。客観的に自分を見れたし状況も把握して、その場所での自分の役割をすぐに理解できた。言葉の操り方、人の操り方は、親に教わった。例えば、自分の行動で相手が感謝するようなことがあった時は、そのことが相手の記憶に残るように言葉を選び、伝えることなど。大学では、政治と哲学を勉強したが、卒業後は就職しなかった。パチンコで稼いだ。コンピューターのように、その店の傾向と対策を調べ必ず出る台を当てることができた。最初の数日は、負けた。出る台を調べるのに、十万円は使った。その後の一週間で三十万円勝つといった感じで、一週間勝ち続けるとパチプロとして店から締め出され次の街に移った。朝から打って、夕方に止めて、勝った時は寿司屋に入った。それ以外の時間は、本を読んで過ごした。

夜はスナックで知り合った女と寝たりした。西に流れて博多に着いた。博多は、勝ち続けても締め出されなかった。肉も魚もうどんもラーメンもうまい博多が、気にいった。前ほどパチンコには、集中しなかったが生活のために打った。店で知り合った男から海岸のゴミ、流木を清掃する仕事を誘われた。その男は、廃品回収の仕事を市から請け負っていた。 ゴミの回収は、詐欺だった。早朝に以前回収したゴミをトラックから下ろし海岸に並べ、あたかも今朝採ったかのように日付の入ったボードを持って写真を撮った。ゴミを広げて、回収するのに1時間もかからなかった。市から、一回に五十万円をふんだくった。英二は、博多に居ついた。飲み屋や図書館で知り合った女と付き合って、女の家に転がり込んだ。そんな生活が、十年くらい続いた。ある日、工具売り場で陳列をしている山田智子を見かけた。ホームセンターには、似合わない若くて可愛い女だった。本当は知っているのにきっかけが欲しくて、ドリルドライバーの売り場を聞いた。彼女の知らなそうなのを見越して。思った通り、知らなかった。待ってる時間、その道具が、穴あけ・ネジ締めを電動でできる道具であることを説明してあげた。次の週は、別のお客さんにグラインダーの売り場を案内しようと迷っている智子をみつけた。智子に近付こうと、その日も店に来て様子を伺っていた。グラインダーの売り場を教えてあげた。彼女は、笑顔でぺこりと頭を下げた。その次は、近くのイオンの駐車場で偶然を装って会った。マクドナルドでお茶をした。博学であることをさりげなくアピールして 智子の話もよく聞いてあげた。聞上手は女が好意的になることを英二は、知っていた。五回目のデートで、寝た。恥ずかしがる智子を丁寧に愛撫した。智子が、団地に小さな部屋を借りてくれた。英二は、自分のアパートを引き払った。智子は父から十五歳も年上の自分と暮らすなら、勘当するとまで言われたそうだが、言いくるめて、実家を出ることを決心させた。これで、しばらく食とセックスには困らないと思った。入籍は、しなかった。 英二の収入について智子が言い寄ってくることが、増えた。英二は、自分の考えを伝えた。資本と労働の意味はなんだとか生きる意味とか哲学的なことを話した。現実は、廃品回収の仕事も辞めて収入がないに等しかった。智子に稼いでもらった。智子が、仕事に疲れて帰ってくると、英二は仕事は見つからなかった(真剣に見つけていない)と伝え、商店街にコーヒー屋ができて、店員の女の子が可愛いと、智子を煽った。英二は、性欲の強い男だった。女から甘えられるのが好きだった。智子の実家では、智子の兄 正が結婚すると言って、良子を連れて来た。 すでに身ごもっていた。良子は、細身の色の白い女だった。東京にいた兄は、仕事を福岡に移した。密かに狭い団地を出て、智子の実家に移り住むことを計画しいた時に、兄が戻ってきたことは想定外だった。兄は、出張で家にあまりいなかった。智子は、二週間に一回実家に顔を出した。 英二が、母親と繋がっておくためにも、そうするように言ったし、英二も顔を出したて、意図的に優しい言葉をかけた。

裏商売 水野(40)の 生い立ち

一九七六年、福岡市博多区に生まれる。父 良文は、マグロの遠洋漁業が商いで、一年に数日しか家にいなかった。母 ノリコは、掛

け持ちで仕事をしていた。旅行代理店で添乗員をすることもあった。主に、当時はまだ少なかったが中国や韓国から来る観光客をアテンドしていた。ノリコは、観光客を決まった店に連れて行きバックマージンをもらっていることを水野に話した。

ノリコは、いいことでもないけど悪いことでもないと、お互いにウインウイン、お互いにとって儲かることが、商売だと。商売は、大きな会社がやってることも同じようなものだと。化粧水に天然成分配合って広告してるけど、全体で一 も入っていないことなど社会の矛盾点を聞かされて育った。偽物のブランドバックを密輸して、畳の下に隠すのを手伝ったこともあった。

ノリコは、どこでいつ覚えたのか中国語を話せた。いわゆる共通語と言われる北京語と方言に当たる上海語も話せた。水野が、学校から帰るとリビングに中国人がいることがあった。日本の化粧品SK2の本物と偽物を見比べていた。ノリコは、水野を呼んでどっちが本物かと聞いた。水野は、偽物には蓋のシルバー部分によく見ないと気が付かない細い線があることを見つけ本物を見事に言い当てた。ノリコは、水野を褒め、細かい修正の指示を中国人に出した。

ノリコは、これから中国の時代が来ると言って、水野に中国語を教えた。水野は、語学を習得することは嫌いじゃなかった。

一年に一回、一つ月だけ帰宅した。水野は、父に空手や中国拳法など武術を教わった。父がいない期間も近くの道場に通った。次の年に帰って、どれくらい上達したか試された。到底 父にはかなわなかったが、確実にレベルを上げていった。中学を出ると、高校には行かずノリコの仕事を手伝った。化粧品の偽物は、結構儲かったが足がつかないように同じ商品を長くは扱わなかった。

水野が、十八歳の時ノリコが、偽物のブランドバックで警察に捕まった。家の倉庫に隠してあったバックの写真が、新聞に載った。

水野は、その後も、ヤクザ組織に所属したりせずに一人で闇のビジネスで稼いだ。一時期は、中国の景徳鎮に出かけ、五百年前の伊万里焼きに似た陶器を大量に密輸した。文化大革命で美術館が壊された時に密かに運び出された本物を見つけ骨董屋に高く売った。まとまった金が入ると、いい車を買い、いい時計をつけ金が目当ての派手な女を連れて地元を闊歩した。仕事は、うまくばかりはいかなかった。マチスの版画の贋作を香港のブローカーに本物だと五百万円で売った後、最近になって鑑定書のサインを指摘され金を返すように執拗に追いかけられていた。その頃、圭人を通じて、山田正と知り合う。正のシルクスクリーンの技術は、ずば抜けていた。水野は、最近、中国の若い富裕層(党関係の二代目子供達)が現代美術を資産として売買していることを知っていた。現金は、預金などから銀行を通じてバレる恐れがあるからだ。

香港のブローカーに、正に作らせたバンクシーとカウズの贋作シルクを三百万円で売った。正には、一千万円の借りがあった。